教師からの叱りに対する生徒の反応と性格特性との関連

○阿部晋吾・太田仁

(梅花女子大学)

キーワード：叱り，教師－生徒関係，ビッグファイブ

The Relationships between Students' Responses to Being Reprimanded from Teacher and Personality Traits

Shingo ABE, Jin OTA

(Baika Women's University)

Key Words: reprimand, teacher – student relationships, Big Five

目 的

怒りの表出に関する研究(阿部・高木, 2005, 2007)では, 他者からの怒りに対して被表出者(怒られた個人)がどのように反応するかが, その後の表出者との関係や問題の解消度に影響することが明らかとなっている。また, 性格特性との関連では, 対人葛藤場面において協調性の高い個人は, 自分の責任を受容しやすいことが示されている(Graziano et al., 1996)。しかし, 学校教育現場において教師からの叱りが, 生徒にどのような反応を引きおこし, どのような結果をもたらすのか, さらにこのプロセスにどのような性格特性が関連しているのかについては, これまでに十分検討されていない。そこで本研究では, 叱りに対する生徒の反応とその後の影響過程について, 性格特性との関連も含めて検討する。

方 法

調査対象者および調査方法 2010年12月に, 三重県中央部の公立中学校1年生から3年生を対象に調査を実施し, 541名(男子264名, 女子277名)から回答を得た。そのうち本研究では, 現在の学年になってから叱られた経験が一度もないと回答した生徒については除外し, 439名を分析対象とした。

質問項目 本研究では, 叱られ経験を“今の学年になってから, あなたが担任の先生から叱られたできごと”に限定し, その中で最も強く叱られた経験を1つ想起してもらった。質問項目は, 叱られ経験後の反応(9項目。“1. していない”から“4. とても強くした”までの4件法), 叱られ経験後の行動の変化(“先生からしかられたことを, あなたはその後もしていますか”の1項目。“1. 前よりもするようになった”“2. 前と変わっていない”“3. 前よりもしないようになった”の3件法), 叱られ経験後の教師との関係の変化(“しかられた後で, あなたと先生との関係は変わりましたか”の1項目。“1. 悪くなった”“2. 前と変わっていない”“3. 良くなった”の3件法)で, いずれも阿部・高木(2005, 2007)を参考に作成した。性格特性の測定には, 小塩・阿部・カトローニ(2012)の日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)を使用した。この尺度は Big Five 性格特性 の各側面に対応する2項目(正方向と負方向), 計10項目で構成され, 選択肢は“1. 全く違うと思う”から“7. 強くそう思う”までの7件法である。

結果と考察

尺度の構造確認 叱られ経験後の反応について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。その結果, スクリーンプロット, 因子の解釈しやすさから2因子構造が適当と判断した。第1因子は, “無視した”“反抗的な態度をとった”“その場から離れた”“気にしていないふりをした”“言い訳をした”の5項目が含まれたことから, “責任拒否の反応”と命名した($\alpha = .74$)。第2因子は“先生に指示されたとおりにした”“反省していることを行動で示した”“謝った”の3項目が含

まれたことから, “責任受容的反応”と命名した($\alpha = .65$)。“なぜ注意するのか, 先生に説明を求めた”はいずれの因子にも高い負荷がみられなかったため, 分析から除外した。

モデルの検証 構造方程式モデリングによるパス解析を行った。叱られ経験後の反応の2因子から関係の変化, 行動の変化それぞれへのパスを設定し, さらにこれらすべてに対して性格特性からのパスを設定した。また, 性格特性の5因子間, 叱られ経験後の反応の2因子間には共分散を設定した。こうした設定を行った上で分析したところ, 有意でないパスがみられたため消去した。その結果, Figure1に示したモデルが最終的に得られた(誤差項および共分散は省略。叱られ経験後の反応の因子間相関は $r = -.16$ で, 性格特性の因子間相関は $r = -.17$ から $.29$ までの範囲であった)。適合度指標は $CFI = .996$, $RMSEA = .013$ で, データに対するモデルのあてはまりは良好といえる。

Figure1 パス解析の結果

結果より, 責任拒否の反応は, 問題行動や教師-生徒関係の悪化をもたらしやすいのに対して, 責任受容的反応は, その反対の影響を及ぼすことが明らかとなった。また, 性格特性の影響としては, 協調性と勤勉性が高い個人は, 自分の責任を拒否せず受容しやすい傾向がみられ, 協調性は関係の変化, 勤勉性は行動の変化に肯定的な影響をもたらしていた。さらに, 神経症傾向は責任受容的反応を生じさせやすく, 開放性は問題行動の悪化につながりやすいという, 各性格特性に固有の影響過程も明らかとなった。

引用文献

- 阿部晋吾・高木修 (2005). 社会心理学研究, 21, 12-20.
 阿部晋吾・高木修 (2007). 社会心理学研究, 22, 258-266.
 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). パーソナリティ研究, 21, 40-52.